

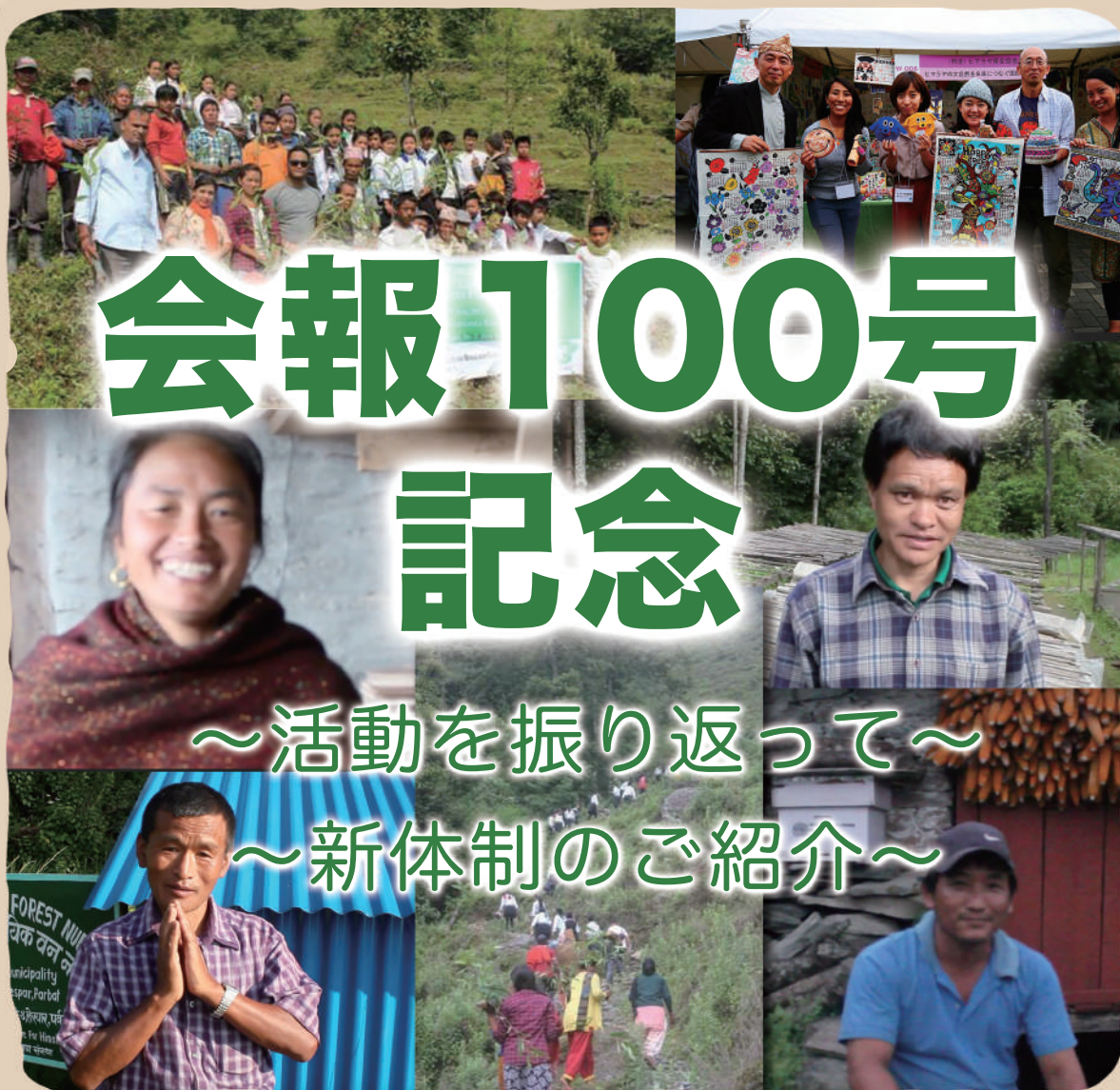


認定NPO法人  
ヒマラヤ保全協会

IHC-JAPAN: The Institute for  
Himalayan Conservation Japan

# Shangri-la

シャングリラ



## 会報100号

## 記念

～活動を振り返って～

～新体制のご紹介～

100円でヒマラヤに1本の

を植えよう!



*One coin One tree on Himalayan, tomorrow will be in your hands.*



# 新 会 長 紹 介

早稲田大学 高等研究所 助教  
博士（農学）  
相馬 拓也

この度、新会長の任にあたらせていただくこととなりました。相馬拓也といたします。簡単ながら、自分自身の自己紹介と、今後の抱負を述べたいと思います。

## ■フィールドワーカーとしての15年間

わたしは地理学、生態人類学、動物行動学を専門とし、ヒトと環境との関係性やダイナミズムをマクロに探究する人文地理学／ヒューマン・ジオグラフィを専門としています。なかでも「人類の極限環境への適応戦略」「天然資源を活かす伝統知・在来知（T.E.K.）」「ヒトと動物の関係誌」を研究テーマとしています。モンゴルのアルタイ山脈を中心として、中国新疆ウイグル自治区、ウズベキスタン、キルギスなどの中央ユーラシアの山岳地帯をフィールドワークの舞台として飛び回り、それも今年で13年目を迎えました（図1）。なかでもアルタイ山脈のカザフ遊牧民に伝わるイヌワシ *Aquila chrysaetos* を用いた騎馬鷹狩文化の研究を10年間続けています [1][2][3]（図2）。また昨今は、同地に生息する希少動物ユキヒョウ *Pantera uncia* の生態観察や、現地の遊牧民とのかかわり、狩猟伝承や民俗儀礼のオーラルヒストリーの研究に着手しています（図3）。いわば地域に根差した動植物資源を用いて、固有の環境に適応した「人類の底力」の解明をライフワークとしています [4][5][6]。



図1 モンゴル北部の砂漠での調査中



図2 若きイーグルハンターの出猟に同行

わたしとネパール・ヒマラヤ地域との出会いは、おそらく誰よりも衝撃的な出来事から始まります。IHCの「JICA草の根技術協力事業（JPP）」評価の仕事で訪れた3日後、2015年4月25日に先のネパール大震災を現地で体験しました。その際には、事業地の一つジーン村に滞在していたおかげで、最悪の事態はまぬかれることができました。しかし、救援機や出入国の混乱で空港は麻痺し、フライトの確保までポカラで不安な6日間を過ごしました。地震発生後のカトマンドウには、いまだに傾いた建物や瓦礫が散乱し、混乱の渦中であつたのをよくおぼえています。

その半年後、事業の仕事が再開した同年11月に再訪し、ジーン村、バランジャ村、サリジャ村での調査を完遂することができました。事業地ダウラギリ州には地震の影響が最小限で済み、いつもと変わらない苗畑の青々しさと笑顔で村人に迎えられました（図4）。



図3 トラップカメラがとらえたユキヒョウ



ネパールの農村部は手仕事で維持された美しい棚田が広がり、人々の暮らしがかつての日本の里山をおのずと連想させます（図5）。秋の田畑では、減少しつつある伝統的な牛挽きの犁耕作が行われます（図6）。山岳の一本道では、ニワトリや収穫物を背に積んだロバや馬の隊商が、鈴の音を鳴らして山奥から街を目指してゆっくりと歩い

てくることもあります（図7）。毎朝毎晩、大きな編みかごを背負って飼料の枝葉やたきぎを林で集めては行き来する人々の凛とした強さ・・・（図8）。その営みのひとつひとつが、ネパール山岳地域に根を下ろした人々の数世紀もの環境適応との格闘であり、繰り返される挑戦の積層に圧倒されるのです。



図4 笑顔で迎えてくれる村人



図5 ジーン村の遠景



図8 荷物を背負う村人（サリジャ村）



図6 牛挽きの犁耕作



図7 山の一本道を進む馬の列



## ヒマラヤ保全協会とのこれから

ヒマラヤ保全協会の創設者・川喜田二郎先生は、1960年代～70年代のネパールの人々と環境の窮状に手を差し伸べました。これからは、その引き継がれた人々の生活、自然環境、きずなを、未来に受け継ぐこと、そして伝統的な技術や在来知を再付加価値化することにこそ、ヒマラヤ保全協会のとりくむ価値が見出されるのです。ヒマラヤ保全協会は、単なるNPOや国際協力活動にとどまらず、ヒマラヤ地域におけるInstitute「研究機関」であることがその名からも示されています。ヒマラヤ保全協会の活動は、現地のT.E.K.の価値を現代の実務と高度に結び付けています。わたしはこれら活動を、アカデミックな視点によりその意義を広く社会一般に敷衍・普及することが、何よりもいま求められていると感じています。そしてネパール・ヒマラヤ地域に暮らす人々と自然環境の関係性を体系的に解明することにも、力を入れていきたいと考えています。事業地でみられるような木材資源や有用植物を活かした伝統知は、世界に誇る在来の叡智と言えます。そして、それは、失われてしまいつつある日本人の森林とのか

かわりにも通じるものがあるといえるのです。

人間と環境のかかわりを紐解く地理学者、フィールド・サイエンティストとして、知と学が地域と社会に益する新しい価値を生み出せる団体として、ヒマラヤ保全協会をみなさんと一緒に前進させていければと思います。



### 《参照》

- [1] Soma, Takuya. 2015. *Human and Raptor Interactions in the Context of a Nomadic Society: Anthropological and Ethno-Ornithological Studies of Altaic Kazakh Falconry and its Cultural Sustainability in Western Mongolia*. University of Kassel Press, Germany.
- [2] 相馬拓也 2015. モンゴル西部アルタイ系カザフ騎馬鷹狩文化の存続をめぐる脆弱性とレジリエンス, E-Journal GEO 10 (1): 99-114.
- [3] 相馬拓也 2017. 鷲使い（イーグルハンター）の民族誌: モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学. ナカニシヤ出版.
- [4] 相馬拓也 2017. ユキヒョウとモンゴル遊牧民—アルタイ山脈における目撃・遭遇事故と家畜被害をめぐる地域社会の葛藤. 日本地理学会2016年度春季学術大会（抄録）Session ID: 704.
- [5] 相馬拓也 2017. ユキヒョウの民俗学—希少動物との共存をめぐる西部モンゴル遊牧民の民間伝承. 日本文化人類学会2017年度学術大会抄録: 77.
- [6] 相馬拓也 2017. ユキヒョウとモンゴル遊牧民のコンフリクト: オーラルヒストリーで読み解く目撃・遭遇事故と家畜被害. E-journal GEO 12(2).



# 現 地 から の 声

皆様の温かい支援が、ヒマラヤ山麓に送られ、  
村人たちから感謝のメッセージが届きました！

サリジャ村 ロクタペーパー生産者  
ムナ・タパさんインタビュー



私の名前はムナです。ちょうど今素材になるヒマラヤジンチョウゲの収穫シーズンなので、村の住民が協力して収穫し、紙すきをしてノートブックを作っています。この仕事で私が見られる収入のおかげで生活がとても楽になっています。

こうした支援をしてくださったヒマラヤ保全協会の皆様に本当にありがとうございますとお伝えしたいです。



サリジャ村ロクタペーパーワーカー  
クマリ・ブンさん



サリジャ村  
森林ユーザーズ  
グループ会計、  
苗畑員会メンバー  
プラタップ・ブンさん

以前、私たち住民は、生活や炊事に必要な薪を公共の森から伐採するので周辺の森林はどんどん後退していました。薪を取るのに片道2時間以上かかる様子を見て、日本から来たヒマラヤ保全協会の人から公共の森の緑化再生の話をいただきました。当初あまり意味がわからないまま始めたものの、伐採後の土地に苗畑を建設し、苗を育成する技術を学び、継続して住民たちと植林を続けたところ今、村は青々とした森に戻り始めていま

す。住民の一人としてこの村を誇らしく嬉しく思っています。また、苗畑は植林のためだけでなく、同じくヒマラヤ保全協会から支援を受けて立ち上げた「紙すき事業」や「織物事業」の原材料の補充にも使っています。住民が技術研修を受ける建物や必要資材、技術研修、マーケティング、経営も学ぶ機会をいただいたので、今は資金の支援を受けなくても自分たちの力で運営をすることができるようになりました。先に進んだ技術のある国から得た支援のおかげで私たちは、山岳部に住み続けながら収入が得られ、生活が豊かになっていることにとっても感謝しています。



シャカムニ・ブンさん



サリジャ織物事業ワーカー  
アサ・バルブザさん



今、売り上げが上がっていて織り場はとても活気付いています。現在8人で互いに家事や農耕機の時間の合間を縫いながら交代で織り機を回しています。

おった生地はポカラのWSDOにNRs.500/mで販売しています。

日本のヒマラヤ保全協会からの支援を受けて、刺草の仕事をやって山での生活で急に病気や怪我、学費などの現金の出費をしなくてはならない時、工面ができるようになりました。本当に助かっており、支援いただいていることをとても感謝しています。

サリジャ織物事業  
リーダー  
ガンマヤ・  
ガルブザ・ブンさん



今は、サリジャからポカラの方に来て織りを続けています。はじめた当時は、道具も織り場もなく大変でしたが、ヒマラヤ保全協会が支援をしてくれるようになってからは、織り場も作っていただき、技術指導をしてくださったことで織り機などの扱いにも慣れていって備品も揃って続けることができました。立ち上げからのメンバーは途中結婚したりして入れ替わりもありましたが、教

えてもらった技術を皆で教えあったりと皆で支えあいました。初めは数人で1つの機を使っていましたが、今では、手に入れた現金収入で各々が自分の機を家におけるほどまでになってきています。

品質管理をしっかりと指導を受けたのち、ポカラの女性団体へのマーケットのリンクもお世話いただいたので、それが安定した販売ルートとなって、私たちは今、売れ残りを心配せずに安心して織ることができるようになりました。

これらは偏にヒマラヤ保全協会のサポートのおかげです。心から感謝していることをどうぞお伝えください。さらにIHC-JAPANの事務局長が今、日本で生地マーケットを探すと伝えてくれています。私たちのおった生地が日本で使っていただけるようになるのか、今後の展開もとても楽しみにしています。

昨今の近隣の村の緑化再生事業を目の当たりにして、我々レスパル村の住民も、自分たちの手で苗木を育て森を再生することを切望していました。ですからこの度のヒマラヤ保全協会のご支援には、村民皆が感謝しています。技術のサポートをいただき、おかげさまで早速、初年度から自分たちで、4,000本近くの苗木を育てることができました。これからもどんどん精を出して自分たちの子供や孫のためにもたくさん学びたいと思いますので、どうぞ継続したご支援をいただけますよう村民を代表して心からお願い申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

レスパル苗畑管理委員会セクレタリー  
ナーシング・ティリジャ・ブンさん





# 現 地 から の 声

のつづき



ベガ村養蜂事業農家  
ダン・クマール・ファガミさん

私は標高1500mのベガ村の山岳部で農耕をしながら、小学校教師の仕事をしています。ここのような山岳部の農家は現金収入がないのが住民の悩みでしたが、2008年から、ヒマラヤ保全協会がこの村で改良巣箱での新しい養蜂の技術を指導してくれたことがきっかけで十数軒の農家が養蜂を始めました。私もその中の一人です。以前も丸太をくりぬ

いた形の原始的な巣箱で蜂を買ってはいましたが、蜜を取り出すときに蜂と格闘したり、逃げられたりと大変苦労していました。今、教えて頂いた改良巣箱を使い始めたら、蜜の取り出しや天敵になるクモのチェックなどが容易に出来、痒いところに手がとどくようになり非常に満足しています。現在4箱まで増やし年に2回の花のシーズンには2.5Lの蜜が取れるのですが、あまりにも美味しいので、家族で皆分け合っただけですぐになくなってしまい、申し訳ないのですが、お売りするまでになっていません。(笑)

今後はもっと箱を増やして販売できるようになりたいと考えています。今後もこうした素晴らしい技術を私たちの村に教えて頂ける事を期待しています。

ベガ村養蜂事業農家  
カア・バハドル・ブンさん



私は農家ですが、ヒマラヤ保全協会からの支援で養蜂技術研修を受け今、2つの改良巣箱を置いています。以前古い形の巣箱を置いていましたが、蜜が取れるのは、年に1回で沢山の蜂が死んだりしていて胸を痛めていました。指導を受け導入した新型の巣箱にしてからは、見たい時いつでも見たい場所を空けることができ、今は、年に3、4回も蜜が取り出せるようになりました。1年に1Lだったのが、今は、年に1つの巣箱から3,4Lも取れるようになりました。現在、始めた仲間でそれぞれ巣箱を7箱ほど購入し、生産量を上げて販売できるようにしようと相談しあっているところです。ただ、近隣の世帯から分けて欲しいという話がたくさん来てるので、市場にまで回すのは難しいかもしれません(笑)。こうした機会をくれたヒマラヤ保全協会にとってもとてもありがたいです。

ベガ村養蜂事業農家  
マン・バハドル・ブンさん

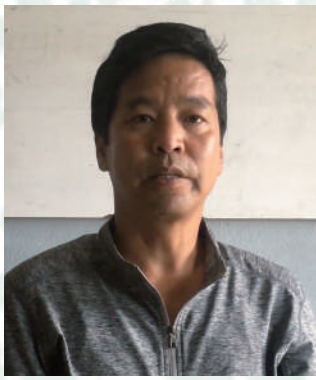


ヒマラヤ保全協会の指導で始めた新しい巣箱は、はじめどうかと思いましたが使い始めると何よりも採れる蜜の量が増えたことや使い勝手が良いことがわかりとても勉強になりました。以前は年に1Lだったところ、今は1.5Lを年に3回程採れています。村の中での需要が高く売ることには事欠きません。このような技術研修をしてくださったヒマラヤ保全協会に心から感謝しています。



たくさん  
の蜜が  
詰ま  
って  
いま  
す！





ヒマラヤ保全協会  
ネパールスタッフ：  
フィールドスーパー  
バイザー

チットラ・プンさん

私は、ヒマラヤ保全協会です仕事を始めて15年以上の月日が経ちます。この間苗畑の作り方や沢山の種類の樹木の育苗、植樹をしてきました。今では、自分の村だけでなく、様々な村の方にも信頼され、相談されるようになりました。今年度も、パルパット郡のレスパル村に苗畑を新設することができ、3村合わせて約26ヘクタールに植樹する準備が整い順調に作業を進めています。これからも現地の地域おこしのために尽力したいと思っています。これまでのヒマラヤ保全協会のご支援に感謝しております。



ヒマラヤ保全協会  
ネパールスタッフ：  
経理

ルケシュ・  
ティリジャ・プンさん

私はヒマラヤ保全協会です2010年から経理と山岳部現場の技術支援の仕事をさせて頂いております。これまでの植林事業に引き続き、昨年度には新しくレスパル村への苗畑建設が実現し、バランジャ村、ジーン村とともに、苗は順調に育ち、バランジャ村では2万0,157本、ジーン村では1万5,091本、そして新しく苗畑を建設したレスパル村で3,836本合計で約4万本の苗を自分たちの苗畑から植林することができました。こうした地道な活動の継続は地元の住民にとって大変意義深いことであることを昨今の活動から体感してきました。このような活動をご支援くださる日本のヒマラヤ保全協会の皆様にとっても感謝しております。いつも温かいご支援を本当にありがとうございます！

## 活動を振り返って

ヒマラヤ保全協会事務局長  
戸田裕子

会報100号にあたり活動を振り返ると、私がヒマラヤ保全協会での活動に関わらせていただいて来年で10年の月日が経つようです。早いものです。東京で偶然に出会ったネパール人女性から、カースト差別や男尊女卑で人生を謳歌できない女性がネパールには沢山いることを知ったのがきっかけでした。再びネパールで再会することを約束して彼女を訪ねて首都カトマンズの空港に初めて降り立ったのは、2004年4月22日でしたでしょうか。

初めて足をつけたネパールで目にしたのは、動乱する国勢の中で水、電気、ガスなどのインフラが整わず、何も当てにできないその日暮らしの国民。純潔と不浄、輪廻転生の中での過去罪(カルマ) という概念で生身の人間が目の前であからさまに差別されるカースト社会。中でも女性たちには社会からの様々な圧力が集まっていました。

初渡航後も日本とネパール行き来する中で、「今やらずにしていづやる。私がやらなくて誰がやる」そう心の中から繰り返し湧き立つ想いにふるい起こされて、縁あってJICAの青年海外協力隊で再びネパールの第二の街、ポカラ市の女性技術開発プロジェクトという団体に赴任してから、私の第二の人生が始まりました。少しずつ技術を身につけた女性たちが自分の作ったもので、わずかな現金を手にし、それを積み重ねた女性が、金の耳飾りを買って嬉しそうに見せてくれたりそこでこれまで見たことのない輝きや笑みを浮かべた女性を目の当たりにして、私の命が初めて芽吹いたといっても過言ではありません。ヒマラヤ保全協会を知ったのも、その頃でした。

ポカラでの女性技術支援活動から、現地の住民の生活、文化、風習ばかりでなく、民族や言語の背景に隠される心象を読み取りながらの草の根の視点の重要性を感じていました。その頃、文化人類学者の川喜田二郎先生の、草の根の活動「アクシ

ョン&リサーチ」を書かれた本に出会い、ひたすらに現地住民に寄り添う国際協力の思想と、アカデミックな視点から活動を分析検証する方法に興味を持ちました。ちょうど当時、植林事業と並べて始めたばかりの女性の生活改善支援及び収入向上事業立ち上げの技術指導をしないかと誘いを頂き、街を離れて、初めて山の中に入りました。

そして私はだんだん、その美しい人々の笑みや輝きは、ヒマラヤの荘厳な山山、森、木々、川、動物、太陽の輝き、染み渡る雨、ドキドキさせられる雹、他、自然環境から受けている日々の恵みと、その凜と人を突き返す厳しさの中で人々が積み重ねてきたものがあってからこそ備わっていく美しさや輝きであること知りました。それまで、教科書やニュースで聞いていた「環境」という言葉を、本当の意味は知らなかったのも同然でした。それから「環境の保全」活動に真剣に取り組みました。こうして先代から受け継いできた当会の事業、植林事業から収入向上事業まで、おかげさまで素晴らしい成果が出てきています。特に今回撮ったインタビューでそんなに期待していなかった養蜂事業の取り組みでも、数年の月日を経て住民に大いに喜ばれる成果が上がっていることが確認できてとても嬉しく思うことと同時に、事業をするだけでなく、アカデミックな観点からの分析と振り返りの重要性を感じました。





# 新理事紹介



## 栗田 康二

2002年に会員になり15年たちました。理事は以前2期勤めたので、あわせて4期目になりました。当初は、パウダル村のチーズプロジェクトを担当し、事業がその後も継続しているのはうれしいかぎりです。今期はMESの復活を目指します。参加者へのその後のフォローもしていきます。若い方にネパールの良さを知ってもらいたい機会なのですが、

諸経費が高騰し若い方にとっては費用負担が厳しくなっているのが課題です。会員サービスとしては、会報、HPやfacebookの他に、中断しているメーリングリストでの情報発信を再開します。会員増強としては、前理事の大平さんが提案された、学生会員を増やすための会費免除も検討していきます。どうかよろしくをお願いします。



## 佐久間 雅俊



私が当会に入会したきっかけは2002年のスタディツアーでした。それまで海外に無縁だった私は未知の場所に対する憧れと、ダイナミックな自然美が好きで始めた登山の影響と、企業に勤めながらも社会奉仕の世界と関わっていたという欲求という、これらの交わるころにこの会を見つけたのでした。2005年に理事となり、休みを挟みつつも今期が通算5期目となりますが、いまだ自分がネパールの住民や自然、当会にどう貢献できるのか迷いの日々です。

私の理解する当会の存在意義は、ヒマラヤ山麓に住む人々の伝統を大切にしつつ彼らが現代社会で健やかな生活を送ることを、彼らを取り巻く森林という自然環境を保つとともに利用することで叶えていく、というものです。そこには初代会長川喜田次郎先生の温かなまなざしがあり、人々が中心にいます。

ところが白状しますと、私の中にはどこかで人々を中心からずらすような力が働いてい

ます。自然環境を保つためにはそこに人間はいない方がいいのではないかと。人間の介在しない自然の美を求める性質が私にはあるようなのです。だからどこかで人間について無関心だったり、人間生活に実用的な発想に乏しかったりします。

反面そういう姿勢は自分が人間であることから目を背けることでありましょう。ヒマラヤの人々が森と共に生きることは、私自身がここで生きることと同じです。たまたま自分の興味の行きつく先の場所に生きている人々の事を考えることで、普段無自覚に送っている自分の生活に改めて思いを巡らします。私たちは自然や環境と相互作用しながら生きている。究極の目的は私たちが生きること。とまあ、こんな風に非実用的な想いを巡らしつつ何か少しでもこの会の、ひいてはネパールの人々や自然環境に実用的なことができればと願い、そしてそれを楽しむつもりでもいます。

## 布施 達治



ナマステ。ヒマラヤ保全協会の名称はウン十年前から知っていました。青年海外協力隊でのネパール生活から帰国したのが19年前ですが、その後は北海道で教員に現職復帰し、すっかりネパールのすべてと疎遠になってしまい、いつかは世話になったネパール人もしくはネパールの役に立ちたいという思いも、日々の暮らしに紛れて消えかけていました。しかし、2015年4月のネパール大震災のニュースが飛び込んでからは、少しでもネパールと接触を保つように心掛けるようになりました。そういうわけで、ヒマラヤ保全協会にも関わるようになりまして、現在1年ちょっとになります。思いがけず理事の話があり、深

い思慮もなくお引き受けしましたが、まだ実は何もしておりません。私ができることは何なのか、半分以上忘れた片言のネパール語を生かせないものか、直接的でなくてもネパールの人々の支えになることができなにか、と考えつつ、最近では、そろそろ何か発言しようかなと思ひ始めております。また、やっぱりネパール現地に行きたいなという思いも強くなってきております。でも仕事もあるし、行けるかな行けないかなと毎日考えています。趣味は理科教育研究とミツバチ飼育と仕事を早抜けしてカフェでだらだら文章を書くことと人権擁護のハガキ書きです。会員の皆様よろしくをお願いします。



## 竹迫 真実



ご存知の通り、アミナコレクションのロングセラー超人気商品手漉き紙の原料は、一部ヒマラヤ保全協会の支援で植えられたロクタからつくられています。全国にチャイハネというお店があり、秋から冬は明るいデザインのネパールカレンダーが沢山販売されていますので、ぜひ手に取ってみてください。

会員の皆様、いつも温かくご支援下さり、誠に有難うございます。理事としてヒマラヤ保全協会に関わらせて頂き3年目に差し掛かりました竹迫と申します。

昨年卒業した前職では、(株)アミナコレクションという会社に勤務しておりました。

学生時代のひよんな出会いより、途上国と付き合っていく面白さに思いがけずすっかりはまってしまったため、同じ学年の友人とは一緒に卒業せず、半年間アルバイトで調達した資金を手に、4か月間ネパールのお隣バングラデシュの家庭で暮らしインターンをするという暴挙に出たのが運のつき、以降南アジアと長い付き合いが始まりました。

絶対に途上国と取引のある会社に就職するのだという意気込みそのままに、念願叶いエスニックファッション・雑貨を企画・輸入・販売するアミナコレクションに入社することに。

当時CSRという言葉が浸透しつつある中、ネパールの商品に支えられて商売をしている会社として恩返しをするような感覚でヒマラヤ保全協会を支援している会社の非常に人間的な姿勢を知るや、ネパール・植樹・仕事をキーワードに丁寧な関係を築いているアミナとヒマラヤ保全協会の関係にぞっこんになったのは昨日のこのようです。

もう理事になり3年も経つというのに、たいては会の活動に貢献できていないことに焦燥を感じる日々ですが、毎年恒例のグローバルフェスタなどでカレンダーを販売する際に、「植樹をしたロクタから繊維を取り出し丁寧に手ですいて紙をつくり、日本で企画したデザインを殆ど“アンティーク”の活版印刷機でプリント、細かなところは女性たちの手による彩色でつくり、その売上げから植樹を支援しているのですよ」と説明すると、お客さんやお手伝いしてくれるボランティアさんの目がきらりと輝きます。その瞬間、なんとも誇らしい気持ちになるのがとても気に入っています。

## 清田 華代



2003年春の学生時代に教授に連れられ、ネパールに行ったのが私とネパールの出会いでした。以来、魂の故郷はネパールと思うくらいにとっても強く惹かれるようになりました。社会に出ても、ネパールと繋がっていたい思いで、たどり着いたのがヒマラヤ保全協会のインターンでした。それからとても長い付き合いです。

現在は、当会のホームページ制作を担当しております。まだまだ不十分ではありますが、ご支援いただいている皆様にヒマラヤ山麓に住む村人の声や暮らしをお届けできるようにして行きます。

2年前に私たちの事業地であるサリジャ村に行った時、そこには日本とは違った豊かさを感じることができました。言葉には表現しづらいのですが、森があり、水があり、人が

あり、暮らしがある。ただそれだけのことで、それがあがる豊かさ、それを知れたことこそが幸せなような気もします。支援していただいている皆様にもぜひ私たちの事業地まで足を運んでいただければと思います。

そして、ネパールも大好きですが、日本も大好きです。機会があれば、日本全国の神社やお寺を巡りたいと思っています。日本の山は、ご神体として存在している場所も多く、とても素晴らしいところが沢山あります。そんな、日本人と山や森の関係を思い出しながら、森と人の暮らしの関係をもう少し距離を縮めて、ネパールの山麓にある暮らしとまでは言いませんが、そこにある豊かさというものが、思い出せる機会を増やして行きたいと思っています。



2017年総会にて、新体制となりました！それぞれの得意分野を活かしつつ、今後の活動を盛り上げて行きます。引き続き、支援者の皆さまのご協力をいただければ幸いです！

何かヒマラヤ保全協会を通して、やりたい活動などご意見があれば、ihcjpn@ybb.ne.jpまでお寄せいただくと嬉しいです！



ジーン村での植林活動の写真



# 日本の植林

北海道岩見沢在住  
栗田 健

栗田康二理事のご子息である栗田健さんが、北海道岩見沢市より北海道の植林事情について、寄稿してくださいました。

日本の植林事業を考えさせられる、とても貴重なレポートありがとうございます！

## 北海道の植林事情

### はじめに

ヒマラヤ保全協会ではヒマラヤ地域での植林活動を継続していると聞いていますが、日本での植林事情についてはあまり詳しくないと伺いました。そこで私が普段関わっている、北海道の植林事情等について紹介します。

### ①北海道の植林の現状

北海道の森林面積は554万haで、土地面積の71%、全国の森林面積の22%を占めています。そのうち、天然林は68%、人工林は27%で全国と比べて天然林の割合が高い地域です。

北海道では、戦後植林されたカラマツ、トドマツなどの人工林が主伐（収穫）期を迎えています。木材価格の低迷、森林所有者の世代交代や地方から都市への人口流出などにより、伐採したあと3年以上植林されない造林未済地が7,300haと全国の約8割を占めています。



岩見沢市内の造林未済地

### ②造林未済地の解消に向けて

国や北海道では、森林所有者の植林に対し補助金を交付し事業の推進を行っています。北海道では、市町村からも上乗せの補助金を措置しており、森林所有者の負担は1割ほどに軽減されています。

しかし、北海道の場合は植林地にササが繁茂する 경우가多く（道北など多雪地域のチシマザサでは3mを超えることも）、植林したあとにカラマツの場合は約5年、トドマツの場合は約8年間の草刈作業が必要です。その後も間伐材の売上収入の見込める25年から40年生ままでに1~2回の除伐（形質不良木や侵入木、ツルなどの伐採）も必要となります。

これらの作業にも補助金は充当されますが、それでも森林所有者には3割程度の負担が生じます。木材価格が高かった時代は、農業との複合経営や後継者のために植林を進めてきた森林所有者も、当時の3分の1程度まで下がった現在では、費用を負担してまで植林する方の割合は低下しています。費用の問題に加えて、後継者が山村から都市へ流出し、土地への愛着が薄れていることも深刻な課題です。

新たに造林未済地を取得し  
植林に取り組む森林所有者Kさんのブログ



このような厳しい現状の中でも、新たに造林未済地を取得し植林に取り組む森林所有者の方もいます。

岩見沢市に住むKさん夫妻は、東京からご主人の地元である岩見沢市にUターンし、市郊外の伐採跡地8ヘクタールを購入しました。現在、今秋の植林を目指しどの樹種をどのくらいの本数で植えようか検討中です。その様子は、Kさんのブログ『うちへおいでよ！みんなでつくるエコビレッジ』に掲載されていますので、興味のある方はぜひご覧ください。

[http://colocal.jp/topics/lifestyle/ecovillage/20170622\\_98542.html](http://colocal.jp/topics/lifestyle/ecovillage/20170622_98542.html)

そしてよろしければ、記事にある「いいね！」ボタンを押してくれるとうれしいです。



エゾシカに先端を食べられたカラマツ



エゾヤチネズミによるカラマツ食害

### ③植林木への獣害

北海道でも本州と同様に、野生動物への農林業への被害が深刻です。耕作放棄地の増加や狩猟者の減少、地球温暖化による積雪量の減少などによりエゾシカが急増し、植林木への食害が増加しています。

また、北海道の固有種であるエゾヤチネズミによるカラマツの食害も多く、被害が大きい場合は植林地が全滅することもあります。

被害を受けた植林地は、補植や改植などの対応が必要ですが、森林所有者にとっては新たな負担となり、植林意欲の更なる低下を招く恐れもあります。そのため、エゾシカ被害が予想される場合は、シカが好まない樹種の選択や、シカ柵の設置などの対策も必要となります。



植林地を囲むシカ柵

### おわりに

林業は農業と異なり、自ら植林や間伐する森林所有者は少なく、森林組合などの林業事業体へ作業を委託しています。間伐は機械化が進んでいますが、植林や草刈は人力による作業が主体です。特に真夏の炎天下での草刈や傾斜地での植林はキツイため、間伐や主伐の作業者に比べて人材離れが深刻です。

今後、人工林資源の充実により、主伐の更なる増加が予想されますが、植林する人材の確保や機械化による作業の軽労化対策も必要です。

本レポートでは、私の住む北海道の状況を紹介しましたが、林業の中でも植林に関する課題はおそらく全国共通だと思います。国では現在、森林環境税の導入を検討しているところです。森林環境税の導入で、植林に関する課題が少しでも解決できるよう期待しています。



# 会報 100号 を 振り返る

理事  
栗田康二

今号で100号となることから、バックナンバーから会報をふりかえります。

第1号は1989.2発行、自然保護のためのネパール・キング・マヘンドラ・トラスト日本委員会（ヒマラヤ保全協会）のニュースレターで、会報名は「PRAKRITI（ネパール語で自然保護）」でした。（写真1）



写真1

巻頭記事は、当時の委員会会長の大来佐武郎氏の「ネパール・自然保護の戦略」でした。（写真2）

『ネパール最後の日は、カトマンズから車で1時間の距離にあるドウリケルのロッジでした。ここから見るヒマラヤの景色はまさに息をのむものであった。しかし、あたりの農村は山の背まで耕され、住民はいかにも貧しい生活をしていました。人口の増加に伴い、農民が森林から薪を伐り出す量が増え、これが土砂の崩壊を促し、・・・』（記事の一部）

今も変わらない地域が今もネパールにあります。2015年の大地震で、大量の材木が伐り出されることになり、ネパールでの森林管理が更に重要になってくると予測します。

第7号（1993.7発行）から、会報名が「Shangri-la」に代わりました。

7月ヒマラヤ保全協会緊急理事会が開催され、ヒマラヤ技術協力会（1974年発足）とヒマラヤ保全協会が合併して新生ヒマラヤ保全協会が発足した記念号です。（写真1）

第8号（1993.11発行）から、ヒマラヤ保全協会のロゴが掲載されるようになりました。（写真3）



写真3

第30号（1999.10発行）の表紙には、ポカラでコミュニティ・メディカル・アシスタントの研修に励む村の女性たちが掲載されていて、2002年のスタディツアーでお世話になったマンガラさんが映っています。（写真4）

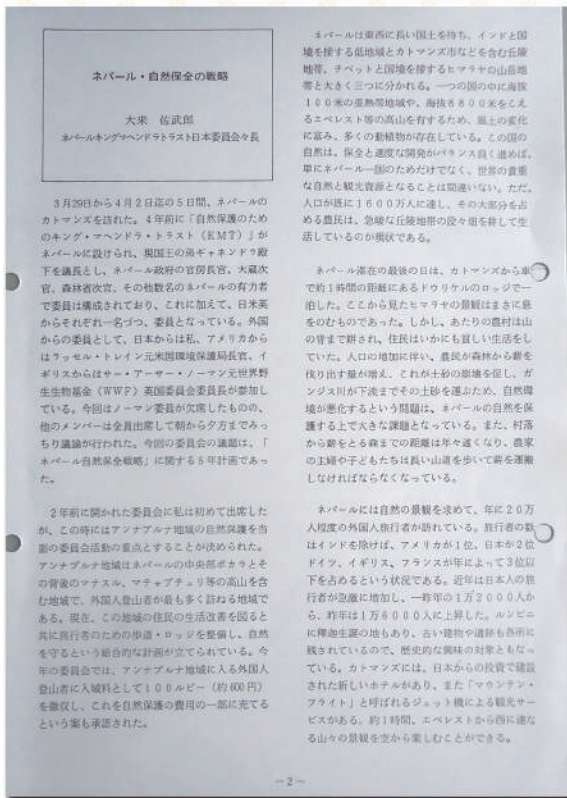


写真2

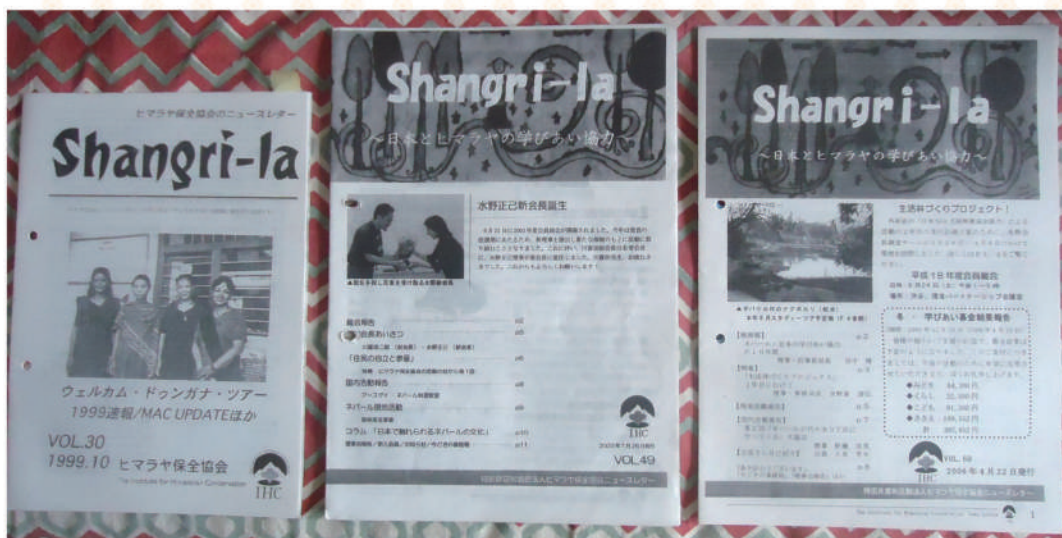


写真4





前会長・新会長  
川喜田 二郎



新会長  
水野 正巳

コミュニティとして生き抜く

ヒマラヤ保全協会の前途については、新会長を迎え  
輝かしい道を進んでいくことを切望しています。ヒマ  
ラヤの山々に住む人々は非常に素朴で、彼らの心は大  
変魅力的です。そんな彼らから日本人が何かを得るだ  
けでなく、私たちが彼らに対してできることは何なの  
かを考え、深い愛情を持って彼らに接しなければなら  
ないと思います。ヒマラヤの人々の暮らし方もまた、  
素朴で大変魅力的なものです。コミュニティのつな  
がりも強く、それでこそ得られる素晴らしいものが  
あります。しかし、彼らのコミュニティの素晴  
らしさも失われつつあります。村人の仕事は  
肉体的労働が中心で、辛い生活ではありますが、「心と  
肉体的健康」にある意味で立派だと感じます。こ  
の健全さを保ちながら、暮らしが豊かになるために  
は、コミュニティ内の合意形成が必要です。また生活  
の中にも、実務的に解決しなくてはならないことが  
あります。つまり、生きていくための生活の知恵を得  
なければなりません。それに対して、教育の重要性を  
感じます。彼らを取り巻く状況を取材し、いかにまと  
めるか。訂正でまとめることも望みをつなげるの  
ではないかと思っています。「コミュニティとして  
生き抜く」という知恵の延長線上で、精神的にも経済  
的にも豊かに暮らしていく新たな道を開きかねれば  
なりません。それは不可能ではなく、今こそ可能にする  
条件が揃っている時と考えます。今後も会員の1人  
として、活動に加えていただきたいと思います。

夢と希望を語りあえる場づくり

このたびヒマラヤ保全協会の会長に選任されまし  
た。そこで、会員の紙面をお借りして、協会の今後の  
活動や運営について抱負を少し述べさせていただきます。  
当会は、前身であるヒマラヤ技術協力会発足から  
数えて30周年の節目を今年迎えます。これを契機とし、  
その経験や実績を活かしつつ、開発協力隊としての  
活動の地平をさらに拓いていきたいと思います。21世  
紀に入って、国際開発協力の世界では途上国の貧しい  
人々の生活の質の向上が第1目標とされるようになり、  
また地域的には南アジアやアフリカの農村が大幅に  
クローズアップされるに至っています。こうした世界  
の潮流も踏まえながら、NPOならではの取り組みを  
押し進めることが、同時に財政事情の好転に結びつく  
よう、会員の皆様とともに努力したいと思えます。ま  
た、日常的な活動については、小さな活動でもそれを  
継続させることによって、大きく育てることが大切  
であると考えております。そのため、会員の皆さんが契  
機に事務所集い、ヒマラヤ地域の未来や、各自の夢  
と希望を語りあえる場づくりに努めたいと思えます。  
最後になりましたが、川喜田二郎先生のこれまでの  
ご尽力に心から感謝の意を申し上げますとともに、先生  
が築いてこられた数多くの成果を皆さんと共に受け継  
ぎ、さらに発展させるよう微力ながら努めて参りたい  
と思えます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

写真5

第49号(2003.7発行)からは、A4サイ  
ズになりました。水野正巳氏が新会長になり、前会  
長の川喜田二郎氏が「コミュニティとして生き抜く  
」で寄稿されました。(写真5)

『ヒマラヤの山々に住む人々は非常に素朴で、彼  
らの心は大変魅力的です。そんな彼らから日本人が  
何かを得るだけでなく、私たちが彼らに対してでき  
ることは何なのかを考え、深い愛情を持って彼らに  
接しなければなりません。ヒマラヤの人々の暮らし  
方もまた、素朴で大変魅力的なもの。コミュニ  
ティのつながりが強くて、それでこそ得られる素晴  
らしいものが宿っています。しかし、彼らのコミュニ  
ティの素晴らしさも失われつつありま  
す。・・・』(記事の一部)

現代日本では、特に都会ではほとんど失われたコミ  
ュニティの大切さをあらためて問い直さなければな  
りません。人生の幸せとは何かです。

第65号(2007.7発行)からは、理想科学  
工業株式会社様のご協力により、カラー版で印刷で  
きることになりました。(写真6)

第70号(2008.10発行)からは、「10  
0円でヒマラヤに1本の木が植えられます」のキャ  
ッチコピーが始まりました。当時は75万本で10  
0万本を目標に活動地をカリガンダキ西岸地域に広  
げていきました。(写真6)

第77号(2010.6発行)からは、PDF電子原稿  
を印刷所に送信し印刷する方式になり、  
自分たちで印刷することはなくなりました。  
紙も上質紙にかわり、写真が鮮やかに表示されます。

↓写真7



写真6

御  
礼の言葉

ありがとうございます。  
ネパールで100万本の植林を  
達成しました。



会長 水野正巳

2014年、ネパールでの植林本数は100万本に  
達しました。正確には、1,065,679本です。ヒマ  
ラヤ保全協会(IHC)が本格的に植林活動を開始  
したのは、1996年。延べ18年間の活動の成果で  
す。一年間の平均植林数は約6万9千本。

ヒマラヤ保全協会の前身は、1973年に川喜田  
二郎先生が設立したヒマラヤ技術協力会です。  
川喜田先生は日本のマナスル登山隊活動の一環  
で、ネパールに渡り村人との交流によって様々  
な支援と指導をされました。ネパールにトレ  
ッキングに行った人はご存知のゴラバニ。そこを  
超えてさらに北へ行くとしーカという村があり  
ます。しーカでは今でも川喜田先生の指導で作  
られた水道が使われています。

このように、IHCの活動は歴史的には30年以上  
にもなります。そのうちの約半分の植林活動の  
活動の成果が100万本の達成です。  
100万本植林したという上、100万本の木が今

でもネパールに現存しているのか？とよく聞か  
れます。川喜田先生が始めた時こそそうですが、  
私たちの活動は村人が必要ならサポートするこ  
とが基本の基本です。したがって植林する本  
の種類は村ごとに違います。材木にする、薪とし  
て使う、動物の飼料にする。道の防除、防  
果実をとる。紙などの原料にするなど、非  
常に多目的です。ですから切り倒された木もあ  
ります。

木を切って使ったら、そのあと植林するとい  
う習慣。樹木は人がケアしなければならぬとい  
う村人の常識を養成する。このことが非常に  
重要です。そうしなければ村の周囲に木があ  
る、森があるという環境が整います。

100万本の植林を達成したのは今年の夏です。  
いうまでもなく、ここまで来るにはサポートを  
されてきた諸団体、先駆者、多くの会員のサ  
ポート、があつたこと。また当然のことな  
がら、ネパールのカウンターパートであるIHC  
(Nepal)とトカリコラストおよび極めて多数  
のネパールの村の方々の協力なくしては不可  
能でした。現在の私たちが行っているIHCの活動は、  
そちらの歴史を踏まえたものであることは間違  
いありません。また今後もこの歴史をさらに継  
続発展させるよう努力を続けるつもりです。ど  
うぞ今後もよろしくご指導、ご鞭撻、ご支援  
いただきますようよろしくお願ひ申し上げます。  
改めて関係各位に誌上を借りて深く御礼申し  
上げます。

以上

第92号(2014.9発行)は、「ヒマラヤ  
植樹100万本達成！」記念号です。  
巻末に前渡邊会長の御礼の言葉が掲載されまし  
た。(写真7)

第99号(2017.7発行)には、新会長相馬  
拓也氏の挨拶を掲載しました。

会報は会員皆様によって作られますので、皆様か  
らの寄稿もお待ちしています。  
また、会報のPDF配信を行っていますので、ご  
希望の方は、info@ihc-japan.org までご連絡下  
さい。



# 国内活動

理事  
佐久間雅俊

グローバルフェスタに参加いたしました！



9月30日（土）と10月1日（日）の二日間、グローバルフェスタが東京・お台場で開催され、今年もヒマラヤ保全協会は出展いたしました。ブースでは活動内容の紹介と、ネパール雑貨の販売をしました。団体会員である株式会社アミナコレクションさんのネパール製雑貨、そして目玉商品としてヒマラヤイラクサで作られた可愛い帽子です。ヒマラヤの村でとれたイラクサの繊維でネパールの女性たちが糸をつむぎ、ウールと合わせてカラフルなデザインで織ったものです。ヒマラヤ保全協会のオリジナル商品です。



アミナコレクションさんの売上の一部、及びヒマラヤ保全協会オリジナル商品の売上は、ヒマラヤ保全協会の活動資金として寄付され、ネパールの女性たちに還元されます！！





もちろん、販売はイベントの目的の一つではありません。本当に大事なものは、会場を訪れた国際協力に興味をお持ちの方々に私達の活動を知ってもらうこと、そして沢山の国際協力団体が参加するこのフェスティバルでは国際協力活動に関わっている他の方々とお会いして情報交換をしたり、親交を深めあったりすることで、それは楽しみでもあります。このフェスティバルで当ブースに毎年お立ち寄りいただいている方もいらっしゃいます。



そして今年特に嬉しかったのは、二日間で四人ものボランティアさんに手伝っていただいたことです。初めて国際協力のボランティアに参加していただいた大学生さん、インドにお住まいになった経験をお持ちの方、道行く人に声をかけて沢山の人のブースに呼び込む名人、そしてカトマンズ出身で日本で日本語の勉強をしていらっしゃる留学生さんもブースに花を添えていただきました。皆さんがいらっしゃることでにぎやかになり、明るい雰囲気を醸し出していました。国際協力活動ではなかなか国内のみなさんに参加していただける機会がありませんが、こういったイベントで皆様にお会いできるのは嬉しいことです。またお会いしましょう！

## ネパール手すき紙の封筒作りワークショップ！



古いカレンダーを利用したネパール手すき紙のワークショップを今年はブース内に常設しました！昨年に引き続きとても好評で、たくさんの方々においでいただきました。

世界に一つだけしかないオリジナルの封筒をみなさん一生懸命に作っていました。とても素敵です！





# 事務局 だより

## MES(マウンテンエコロジーツアー)開催決定！

2018年2月開催！

～ヒマラヤ・トレッキングと事業地見学～  
ヒマラヤ保全協会が長年支援を続けている事業地へ！

- ・国際協力の現場を間近で見る
- ・ヒマラヤをトレッキング
- ・ホームステイ、ヒマラヤ山麓生活体験
- ・紙すき事業、織物事業の見学

詳細が決まり次第、随時ご案内します！



## みんなでパハール in 吉野！

10月21日(土)、22日(日)

参加費：10,000円

登る山：奈良県吉野山

(金峯神社～ロープウェイ吉野山駅：主に降り)

※途中で水分神社、花矢倉展望台、

吉水神社などに寄ります。ハイキング前日は

奈良の一軒家を貸し切り宿泊し、交流を深めます。

ハイキングのみ  
ご参加も大丈夫です！



詳しくは、下記の  
メールアドレスまで

## 寄付で支援する

100円で1本の木がヒマラヤに植えられます!!

1口 3,000円から何口でも結構です。

下記の振込み先にご送金ください。

## マンスリーサポーターになる

毎月 1,000円 からマンスリーサポーターになることができます。マンスリーサポーターの皆様には、「活動報告書&計画書」年1回)をお送りします。

## 会員になる

年会費：個人会員 5,000円 ・団体会員 30,000円

会員の皆様には、現地の活動が盛りだくさんの

会報『シャングリラ(Shangri-la)』をおとどけします。

## ■ みずほ銀行新宿南口支店 普通2005209

認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会

## ■ 郵便振替

00100-0-709154

ヒマラヤ保全協会

※銀行振込みをご利用いただいた場合は、ご氏名(ふりがな)とご住所を、e-mailにてご連絡ください。

※国税庁より「認定NPO法人」として認可されておりますので、皆様からのご寄付は、税法上の特例措置の対象となります。

100円で1本の木をヒマラヤに植えよう！ ご支援お待ちしております！

シャングリラ第100号 2017年10月15日発行 編集・発行 認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田キャンパス9号館 8階 808号室

TEL: 080-3570-8458 e-mail: ihcjpn@ybb.ne.jp ホームページ: <http://www.ihc-japan.org>